ま道路あれば谷を臨つる兩高地を連絡するもののみ、かゝる地方には谷にそひて主要道路走ることなし。壯年期には平坦なる高地は漸次面積縮少し、鋭き山背を生じ、谷底にそひて平地發達するを以て、此地方にては谷地耕作行はる。壯年末期より谷の傾斜緩漫となり、谷の側面の傾斜地耕作行はるゝに至る云々。〔以上下田〕

彙報

◉久原氏蒐集圖書の寄託

久原房之助氏は我國に於ける古書珍籍の散佚を憂へ、和田維四郎氏に託して數年來その蒐集に餘念なかりしが、將來その主なる圖書數千點を骨子として特殊の文庫を京都に建設するの計畫あり先づ管理者和田氏の名義を以てこれを京都帝國大學附屬圖書館に寄託し來りしかば、同圖書館にては特に係員を定めて之れが整理に從事せしめつゝあり。聞くところに據れば、その主なるものは古寫經並に古版本にして、前者は和銅經より平安鎌倉時代のもの凡そ百卷、その他慶長以前の古鈔本古文書頗る多く、後者は百萬塔の陀羅尼經を初めとして各種の版樣を網羅し、就中五山版は殆んど全部を蒐集し盡くせりといふを得べし。尙德川時代に於ける名家の眞蹟類も多く、又黃表紙千餘種、黑本五百種、赤本卅餘種の蒐集は最も注意すべきものにして、何れの圖書館にも見る能はざる所ならん。異日整理の後は學者の研究に資すること大なるべく、近時富豪が漸く精神的事業に注目してかゝる企畫をなすを見るは誠に學界の慶事といふべし。

◉日向の原史時代遺跡調査

京都文科大學にては數年來冬期に於て宮崎縣史蹟研究所に教官を派遣し、縣と協同の下に同地四都原古墳の發掘調査を行ひ來れるが、過ぐる冬期休暇にも、濱田教授は梅原囑托を從へて同地に出張し、十二月廿八日より約二週間同縣史蹟調査囑托若山甲藏氏の案内にて特に石器。土器を伴出する延岡附近其他七ケ所の遺跡の發掘を試み、層位學的の調査を遂行して、方今學界の注目を惹きつゝある彌生式土器につき興味ある資料を得たりと云ふ。今其概要を紹介せんに、先づ縣の北部東臼杵郡にては、延岡を中心として其の周圍の遺跡を踏査し、南方村縣苗圃の遺物散布地と、同村大貫の貝塚とを發掘したりしが、前者は四周小山を繞らせる高臺にして表面に石斧、石庖丁、石鏃、玉類、土器等散布し、殊に石鏃の内には確に金屬器を模せる珍奇なるものあり。土器は彌生式系統の赤燒にて、其包含狀態は、本來表面に近く存し、地下には殆んど遺物を含まず、大貫貝塚にありては、台地端に長き溝を作

りて發掘したるに、地下約一尺二三寸にして貝層に達し、層の厚さ一尺五寸乃至二尺あり、主として カキ。ハマグリ等の貝殼より成り、少しく土を混じ、内より土器片、獸骨、石鏃、石斧、石環等を發見せり。土器は破片のみなるも、赤味ある灰色厚手にして文樣を有し、純然たる彌生式にてはあらざりき。次に天孫降臨の古地と傳ふる西臼杵郡高千穗村に至りても二ケ所小發掘を行ひたりしが、一は村の北方に近き台地にして、石器類を多く出す所、包含狀態は表面より一尺四寸以下三尺に至る間に土器片、黑曜石の石屑を多く存せるにて、其の土器は淺手の黑褐色にして關東の貝塚より出す繩紋土器と殆ど區別なかりき。第二の地點は字猿伏と稱する所にて、前者の北東約十五丁に當る山麓の臺地なり。ここは遺物包含の狀態殆んど前者に等しきも、土器の樣式は著しく厚手にして、燒方を異にし、純粹なる繩紋土器と云ふべからざるは注意すべし。一里半北方にある岩戸村に於ては純然たる彌生式土器を多く出す。今同地神社に藏するものに同式の代表的の形を呈せるあり、同時に附近より寧ろ繩紋土器に近く、而も一方彌生式に系統を引ける原始的なる土器の出土せるあり、岩戸高千穗兩地の中間に當る地點字尾谷よりも同種の大甕を出したるは、土器の樣式研究上の重要なる材料とす。宮崎附近に於ては、近く存在を知られたる宮崎郡瓜生野村柏田の貝塚、同加納村の彌生式土器包含層、東諸縣郡綾の遺跡の三ケ所を調査したりしが、中に就いて柏田の貝塚は同地直純寺の境内、大淀川に沿へる臺端地にありて、其の中腹に約一尺の貝層をなし、貝層約一尺内外の僅に貝殼を混ぜる部分より打製石器、土器片を出す、土器は大貫貝塚の之れと同樣厚手にして、文樣は繩紋土器に類せる所多し。綾村の遺蹟は今次調査中最も興味を惹ける一にして、字北俣の内尾立に存し、廣き臺地上にあり、表土下約一尺より以下褐色土に至る四尺の間に石斧、錘石等と共に多數の土器を包含し、而も其の土器は繩紋土器の系統に屬する曲線文樣のものに彌生式の高杯の共有するあり、兩者に層位的の相異なきは、其の後教授の調査せる薩摩揖宿の遺跡に似、これを高千穗の事實と併せ考ふるに、所謂彌生式と繩紋土器とか全く系統を異にせるに非ずして、兩者に聯絡あり、たゞ製作の變化せるものかとも考へらるゝといふ。加納の包含層は字下加納、福神屋敷址にして、同じく臺地端にあるもの、石斧に混じて完全なる彌生式土器多數と齋瓮片を發見す。埋沒の狀態は北腹に於て試みられし小發掘に依れば、地下約一尺五寸より四尺に渉る間に包含され、殆んどすべての土器の形式が畿内の彌生式と同一なる中に、一個厚手の繩紋土器の式に類せるを擾たりといふ。以上の調査は專に日向に於ける原始時代の研究に新事實を與へたるのみならず、考古學上最も重んずべき一般土器の研

究の面目を一新すべき資料を提供するものなり。其の詳細に至りては別に報告せらるべし。

史學研究會

例會　二月二日午後一時三十分より京都帝國大學文科大學第九教室に於て開催し左の講演ありたり

一、加羅地方旅行談　　文學士　今西龍君

氏は朝鮮總督府の囑託を受けて昨年九月下旬より十一月上旬に至る迄古への所謂加羅地方即ち朝鮮慶尚道洛東江流域を旅行調査せられたるも、報告提出以前なるを以て概説に止むべしとて、先づ同地方の地勢より説き起し、次に加羅諸國の所在地なりしとの傳説ある固城、金海、咸安、昌寧、咸昌等の説明に及び、特に碧珍加耶星山加耶の傳説を説き、最後に其地方の古墳城郭について調査の一班を述べられたり。

一、支那旅行談　　文學博士　内藤虎次郎君

昨年十月末より十二月末に至る二箇月の間、青島、濟南、泰山、曲阜より南京、上海、杭州、蘇州、漢口、長沙の地を巡歴し北京に至り朝鮮を經て歸學したる旅行に就き述べ、其の見聞中特に史學に關係あるものとしては北京東華門内なる清史館が清朝史を編纂せる狀況を述べ、館は清朝時代の國史館の遺物にして館長は元の盛京總督趙爾巽氏なり。而して編纂の任に當れる支那學者は、總纂官は馬其昶字通伯あり、古文家にして吳汝倫の高弟、集虛草堂の著ある人なり。此の人の下に吳廷燮が各朝本紀の撰述に當り、李經芳の見たる李經羲、古本籍に富みて楊守敬の日本より將去せし宋槧李推官披少集を珍藏せる鄧邦述、考古學に通ぜる秦毅世、史微の著者なる張爾田、俞樾の孫なる俞陸雲の諸氏專ら調査編輯の任に當る、清史編纂の體裁に於ては在來の各代正史と比較し特に新しき試と認めらるゝものを見るに、本紀は太祖より宣統に至る十二本紀は別に謂ふべき所なしと雖も十九志の中にて國語志、氏族志、交通志、邦交志、外教志、九表の中にて藩部世表、疆臣年表、交聘年表　十九列傳の中にて疇人列傳、明遺臣列傳、藝術列傳、貨殖列傳、客卿列傳、屬用列傳等は從來の正史の體裁と趣を異にする所なり。尚其の根本なる史料につきては實錄館國史館にて作り置きたる歴朝實錄及び清朝時代に撰し置きたる光緒迄の各本紀列傳、滿文老檔の原本と想はるゝもの、長編稿本、歴朝奏議正本、蒙古回部王公表傳等あり、次に京師圖書館は近く宮城の太和殿前平門へ遷る筈なるも今日尚方家胡同に在り此處にては華夷譯語の原刻本ありて洪武二十二年の序あり四庫全書亦悉く熱河の文津閣のものを藏す、此外に面會したる名士は新元史の著者なる柯劭忞あり、武昌の柯逢時の家に經世大典五十冊の珍藏せら

るゝを聞くを得たり。蒙古兒史記の著者なる屠寄あり、又武昌の故楊守敬の家を訪ひしに、門人熊會貞が水經注疏の遺稿を整理中なること、日本より將去せし珍本は今皆故袁世凱の有に歸し居れる事等を述べたり。

當日は會員の來會する者亡慮百二十餘名に達し、內藤博士將來の品、今西學士調査の史料等の陳列品亦多かりしが、就中、長崎土產長崎唐人屋敷の繪卷物、誥命二種　京師圖書館善本書目、直隸名勝志、南京城瓢、宋暈琦墓誌、長沙岳麓山麓山寺唐李北海書碑、山東靈巖寺李北海書碑、泰山十字殘碑、湯若望曆書等ありたり。

◎讀　史　會

例會　大正六年十二月十八日午後六時より學生集會場に於て開會出席者三浦、喜田博士、今西助教授、西田講師、清原、魚澄、中村學士、座田、古田、宮森、辰馬、牧、下川、鈴木、桑原　長谷、橋川、岩橋、梅原諸君、左の講演あり

老松堂日本行錄に就て　　三浦博士

此の記錄は應永二十六年將軍足利義持が僧亮倪を朝鮮に遣したるに對し、世宗が回聘使として其翌年我國に派遣したる宋希璟（號老松堂）の紀行なり。抑も應永二十六年以明、朝鮮の聯合軍が對馬を侵したる年にして、同年中に我が將軍が敵國たる朝鮮に使者を遣はし、彼れ亦回禮使を送りしことは實に史上の一奇現象なるが、本書は這間の消息を知るに足るべき興味ある材料を含む。之に據れば應永二十六年六月明の使者呂淵の我國に來り頗る激越なる句調を以て來聘を求め、我れ若し肯かざれば朝鮮と聯合して來寇すべしと脅かしたるに殆んど時を同じくして、朝鮮の對馬に侵寇の報を得たれば義持は之を以て直に彼の明使の言り實現せられたるものと信じて大に憤れり、然るに九州探題は朝鮮の對馬島民に薄きも九州の民に厚きを見て其眞意を疑ひ、將軍に勸めて偵察の爲め使を遣せるなり、故に回禮使の來るや探題は大にこれを優遇せしも、將軍は然らず、希璟が將軍の外交顧問陳外郎等を通じて對馬攻擊の理由を述べ、朝鮮の我國に決して他意なき事を語るに及びて將軍の意始めて解け待遇一變せりとの本書の記事はよく此間の消息を傳ふるものなり。其他本書には我海賊の事を始め風俗についても記するところ多く、我記錄の缺陷を補ふに足るものあり云々。

南朝鮮の古墳に就て　　今西學士

余は今秋朝鮮總督府の依囑に依りて古蹟調査幷史料調査のため善山、星州、高靈、咸安、金海等古の伽耶、我國の所謂任那地方の古墳に就きて調査せり、報告も未だ提出せざれば發表の自由を

有せざれども公會ならざる本會に於て差支へなしと思ふことだけを語るべし。此の地方の古墳は多く山岡に群をなし、中には頗る大形のものあり、其の形式は總て圓墳にして我國に見るが如き前方後圓又は車輪なく濠を廻らせるものもなし又埴輪を發見せず、墓壙は一の塚に二若くは二以上あるものあり其方向は少しも一定せず、壙は竪穴式にして自然石を以て長方形に積み重ね上層に至るに從ひ幅狹さを常とすれども咸安のものは垂直なり、天井には幅廣き蓋石數個を以て覆ふ、大古墳にありては壙内の幅員（横）五尺位、高さ五尺乃至六尺最上部の幅員二尺乃至二尺五寸にして一般に構造粗放なり、新羅以後のものは壙の一隅に羨道を有す。墓壙の内には石槨（又は石棺）なるもの稀にあり、近年賊の窃掘に罹るもの多く副葬品を得ること甚困難なり、副葬品の種類は土器、武器、玉類等にして鏡は此地方より從來僅に一二を出したるに過ぎず而も其の製作精巧ならず、土器は我國の祝部土器と同樣のものなれど手法に多少の相違あり、玉類には勾玉、管玉あれど粗製なり、善山にて嘗て黄金の冠飾を發掘したることありし、要するに南朝鮮の古墳は其構造遺物共に我國のものに比し貧弱の感ありされど此地方の古墳が純粹の韓人の殘せる物なるも兼て韓人の居住せし京畿忠淸に同種の遺物を有する古墳の存在せざるは注意すべき要件なり云々。

例會　大正七年一月二十五日午後六時より學生集會場に開く、出席者三浦教授　江馬、淸原、中村學士　古田、下川、辰馬、牧、鈴木、桑原、長谷、橋川、岩崎の諸君、左の講演あり。

探湯に就て　　下川君

我國に古來行はれたる探湯は一種の神明裁判にして、其語義に就ては本居翁、白鳥博士、金澤博士等の間に異説あり、探湯は我國にても種々の方法ありて必ずしも熱湯中に腕を突き入るゝものと限らず、且つ上古未開の時代に在りては殆んど世界各地に行はれ（一）火を用ゐる法、（二）熱湯熱油等液体を用ゐる法、（三）飲食に依る法、（四）動物を用ゐる法、（五）武器を用ゐる法、（六）其他の方法等種々の方法あり、然るに我が隣邦支那と朝鮮とには古來未だ嘗て探湯の行はれたる記録又は證蹟を遺さゞるは異數とすべし。此の探湯が未開蒙昧の時代に於て罪の有無を判斷する有効の方法たりしは今日心理學及生理學上學理的に証明し得る所なり云々。

風俗史上より見たるヒゲ　　江馬學士

ヒゲには三種あり、鼻下の髭、頤の鬚、頰の髯是なり、髭は古くからウワヒゲ又はカミツヒゲと稱し、鬚はシタヒゲ、アゴヒゲ、シモツヒゲ又は天神ヒゲと云ひ、髯は一にシヤウギヒゲの名あり、古はヒゲを剃ることなく生るに任せたりしが、佛教傳來後之を剃

る風現はれ、萬葉集にヒゲを剃ることを歌へり、又僧侶の像にはヒゲ無し、これ剃るの証なり、然れども俗人の生やしたるは聖德太子の繪像を見ても知らる、奈良朝時代より平安朝初期にはオホヒゲを蓄ふる者あり、其形の時代の趣味に依りしが如し、武將は一般に嚴めしきヒゲを生したり、平安朝の貴族は多くはヒゲを蓄へずして剃ること流行せり。鎌倉より室町の末迄は特殊の沿革なし、此時代の武士には多くヒゲあれど、嚴めしきもの少し、民間にては職業貧富に依らず、或は髭、或は鬚、或は髯を好によりて生せり、老僧にヒゲあるものあり、殊に山伏、虛無僧はヒゲあるもの多かりしが如し、戰國時代にはヒゲの多きを尊び、自慢する風あり、之をヒゲマンといふ、武士殊に然り、秀吉は髭なかりしと見に、作髭を用ゐたり、慶長の頃には一般にヒゲを忌む風流行したるも、清正の如き例外もあり、且つ後にはヒゲの種類も多くなれり、德川中世には庶民のヒゲを蓄ふるを禁じたり云々。

右講演後三浦教授は當日恰も故栗田博士の二十年祭に相當するを以て博士の修養、學風、性格、日常生活特に大日本史の完成に盡瘁せられたる前後の事蹟を教授の親炙せられし處に依りて談話せられ、一同先生を偲べり。

研究旅行 二月十、十一兩日神戸明石方面に研究旅行をなせり、來り會する者、三浦博士、西田講師、魚澄、中村兩學士、辰馬、牧、古田、鈴木、長谷の諸君

十日、午前七時十八分京都驛發九時神戸驛著、それより福原濬次郎氏の東道にて先づ湊川神社に參拜し、社務所及び寶物殿にて古文書、古器等を觀る。國寶楠木正成眞蹟法華經跋語を始め、元祿八年十一月廿五日酒泉直の記せし楠公石碑建立由來記、大正三年回議書類綴の中にある元祿宜上山閑談話、聽取書等注意すべし。殊に後者は安政三年頃に於ける廟所の狀況を知るべき好資料たり。次に廣嚴寺に到る。有名なる楠氏主從の位牌の外、德川光圀の千嚴和尚に宛てし書狀ありて、その表裝の齊昭の時に成れるは興味を惹く。それより市立商業學校(或は云ふ新内裏跡と)の前を經て荒田村字高畑の高畑神社(今は八幡宮となれり)に至る。こゝは賴盛山莊の跡にして、大なる松三本あり、俗にさんしよ松と云ふ。西北の方に一段低く雪御所の跡を臨む。時正午を過ぐれば、乃ち報國義會事務所にて少憩、一行午餐を共にし、こゝにて福原氏所藏の法光寺文書及び發掘品を見る。出でゝ第二期湊川の跡を辿り川池に至る。この池は第一期湊川の名殘僅に殘れるものなりといふ。それより頓田山に登る。東方會下山に隣し眺望絶佳、頂上に二本の松あり。江宗山房王寺經塚なりと云ふ。下りて能福寺に至る。天台の古刹にて阿闍陀の國王の名代「へいさるぼつと」より本多上野守宛の書狀あり。傳ふるところにては九州某大名がこの寺

に宿泊せし時與へたるものなりと。その他文安元年十二月廿七日生田村結解狀、慶長十五年九月廿一日能福寺屋敷分目錄、天海僧正書狀（卯月十三日附金地院宛）、後陽成天皇宸翰等あり。宸翰は下畫ありて乾元亨利貞と認めらる。次に來迎寺（俗稱築島寺）に至る。兵庫築島傳、貞應年間船定寫（奥に攝州兵庫津嶋上岡重武とあり）等を藏す。それより八連寺跡（今住吉を祀る昔の花御所なり）清盛塔、藥仙寺、眞光寺等を順次觀覽、黄昏兵庫驛より電車に乘じて明石に宿す。

十一日。早朝出發、午前十一時頃伊川谷村なる太山寺に著す。こゝは天台宗の巨刹にして、往昔は多くの僧兵を擁し、建武中興に勳功ありき。所藏の文書、遺物等甚だ豐富なり。今その重要なるものを擧ぐれば大塔宮令旨は言ふもさらなり。平家が嚴島神社に納めしものゝ下書なりとの傳說ある法華經は、總數三十二卷の中、妙莊嚴王本地品第二十七及び陁羅尼品第二十六には扉畫あり、囑累品第二十二には扉に金泥にて金地に文字を記されたり。又佛說大吉祥陁羅尼及び阿含經ありて、陁羅尼經の奥には甲戌千高麗國王發願寫成金字太藏、裏には陪山人皇書とあり。その他永福門院より布施畑村を寄進せられたる元應三年の寄進狀、足利直義、及び同直冬の禁制數通あり。天文十二年の大山寺內檢目錄は當時行事たりし寶積坊定仁の記せるものなり。永正六年十月十二日の日附ある紙園千部經法則には、同年九月二十七日より當寺の僧京都に行きて洛中洛外の僧百餘人と共に千部經を始むることあり。又天文八年十一月二日の明石四郎左衛門尉長行寄進狀には古今集以下の勅撰私撰の和歌集、朗詠集、伊勢物語、平家物語、曾我物語合せて十一部を亡妻善室昌慶禪定尼卽身成佛のために寄進することを記し、これら諸集の奥にはすべて奉寄進大山寺御本尊爲明石四郎左衛門尉長行妻女善室昌慶禪定尼卽身成佛也との跋あり。この他にも尙佛畫に優秀なるもの甚だ多く、一々枚擧に遑あらず。四時頃同寺を出發して神戸に向ひ、六時四十六分神戸驛發列車にて歸洛せり。

◉支那學會

例會　二月十六日午後六時より京都帝國大學文科大學第九教室に開く會する者狩野、內藤、高瀨諸教授、羽田、今西兩助教授、富岡講師、卒業生、在學生等二十二人左の講演ありたり。

一、參天兩地に就いて　　日名靜一君

周易說卦傳の參天兩地をは韓康伯の註に基きて研究したるが、此の解釋法にて、馬融は參天兩地倚數の文句は一二三四五は生數、六七八九十は成數にして、前者の合計三十三、後者の合計二十二となるの意卽ち三合二合の說をなし、鄭玄は天覆地載說、孔穎達

は三説、關期は一數の兆二に生じ三に成るとて五説をとり、蘇洵は三位二位説、郭子和は箸蓍説、朱子は天圓地方説なることを述べたり。

一、支那旅行談

内藤博士

昨年末二個月間の支那漫遊にて觀察されたる政界の風潮に就て述べ、經濟界の趨勢を論評せられ、猶遥日逝去せし王先謙の學界に於ける功績を述べられたり。當夜陳列する所のものは教授將來のもの及王先謙の著述を以てしたるが大概左の如し、

最新司法判詞、中華新武術率角材、大理院判例要旨滙覽、民國行政統計彙報、大清民事訴訟律草案、大清刑事訴訟律草案、中華六法、大清刑律分則草案、大清刑律總則草案、修正刑法草案理由書、大清民律草案、支那研究資料、山東稅務輯畧、中華基督教會年鑑、經界法規草案、田賦芻議、大理院統計簡明表、中華民國第三次教育統計圖表、財政説明書、民國財政史

釋名疏證魏、鄭公諫錄、景教碑文記事攷正、日本源流考、經學通詁、漢書補註、荀子集解、尚書孔傳參政、續古文辭類纂

陳書、王先謙書、陳寶琛意、徐世昌書

◉名古屋史談會

一月二十二日午後六時より名古屋市會議事堂に於て例會開會、文學士栗田元次氏は「大阪陣と浪人者」の題下に王朝時代の牢人が浪人となりしことより、大阪籠城の狀況を説いて浪人の召抱に移り、城中に集りし浪人の種類より戰後の處分に及び、本來大阪に仕へたるものが戰後浪人となりしものを古參浪人と呼び、戰爭の爲めに召抱へられて戰後浪人となりしものゟ新參浪人と云ひ、前者に對しては緩に、後者に對しては嚴なりし顚末を各藩の史料に據り詳細説明せり。次いで青木錄次郎氏は「八瀨の話」の題下に其歷史、風俗、人情を説明し、終つて同氏著「八瀨」一部宛を會員に頒ち、午後九時散會、來會者三十五名。

二月十五日午後六時半より同所に於て例會開催、文學士若山善三郎氏の「本朝通鑑に就いて」の講演あり、東京史學會が創立二十年の紀念として此の書の出版を企て漸く近時に至りて刊行せられんとするに至りし事情を述べ、是れに關係せる同氏の苦心談より同書の解題に及び、紅葉山文庫本、將軍御手許本、足利文庫本、帝國圖書館本、德川侯爵家本の異同を辨じ、國史館目錄に基づき當時編輯の困難なりし事情を縷述し、德川侯爵家本史料編纂係の將軍御手許本の寫等關係書册を示せり、續いて尾作竹猛氏は「尾張に於ける新文明の先覺者」と題し、植物學者として伊藤圭介の事蹟を知るものはまた水谷豐文を忘るべからず、砲術家として上田帶刀の功沒すべからざると同時に吉雄東畢の火藥に於ける造詣

を知らざるべからずとて、上田帶刀と柳川春三との關係より柳川の傳に及び、柳川が我邦に於ける新聞と雜誌との元祖なる外、洋算、寫眞に關する著書の嚆矢なることより其略傳を說明せり。午後九時散會、來會者三十餘名。

二月十九日午後六時名古屋市役所樓上に於て臨時會開會、醫學士奈良坂源一郎氏の「蕪澤碑并に多賀城碑に就いて」の講演あり兩碑拓本を示して實見談を述べ。次に柴田常惠氏の「矢作の廢寺址と猿投の古文書」の講演あり、其要旨を擧ぐれば、三河の國分寺の鐘は、複雜なる文樣及び銘文なき爲めに、世に知られざるも奈良朝のものなりとし、渥美半島福江附近に窯址あり、東大寺大佛殿の銘ある布目瓦の出づる處あり、鎌倉時代に大佛殿建立の際燒きたるものならん、福江大字保美に入江の跡幾に存する船着地ありて、其路筋に古瓦片多きは此地より船載したるものと思はる。矢作町字北野の高地の北方に六十八間の土壘あり、西方及び東方にも土壘の痕跡存し、方形なりしを想像せしむ、布目瓦出づるもの多く、此正方形の中央に高さ二尺餘の壇は寺院の講堂址なるべく、礎石ありて七間に三間の堂なりしを察すべし。其北方より一寸二三分の磚佛出でたり、此邊は講堂の奥壁に當る箇所なるべし。又金堂、塔、中門の趾と思はるゝ處より古瓦出づ、蓮瓣六瓣にて、周圍に三重の圓あり、中軸は隋樣にて、漢瓦に見る如き丸玉瓣の間にあり、尚南方に當りて百萬塔式と思はるゝ五段の石塔樣のもの出づ、又瓷器に屬する朝鮮式土器破片も出づ、思ふに此遺址は本朝文粹等に散見せる藥王寺のものならん、又和志取神社境外に弘仁式觀音坐像四体あり、擧母町岩松杏三方には優秀なる藥師像、高橋村字野見の野見神社及び其附近の須惠ケ原には瓷瓮の破片出づるあり、猿投神社の古反古中に鎌倉時代の孝經論語史記白氏文集帝範等あるを發見す。建久、天正、延文等奥書あるもの多く、又正平等南朝の年號を用ゐたるも多し。惟ふに加茂郡は古の高橋莊にて、同莊は大覺寺派の御領たりしは、後宇多帝の御領目錄にも見ゆ。足利氏の南朝に盡したるは此地の南朝の御領たる關係によりしにあらざるか宗良親王が金葉集に足利氏に迎へられしとあるも此邊の事なるべし、故に南朝襄へたるも此地方は永く其正朔を奉じたりと見ゐ、前記の書中正平二十何年の奥書あるものあり、此下流に北朝の仁木、細川、の本貫あるに對し面白き現象なり、三河古代の文化を考ふるに猿投は鐸か高橋は高土師、鷲取又は和志取は土師鳥にして、土師部の住せし地ならんか云々。次に文學士堀田璋左衛氏は多賀城碑僞作たるを辯じ、柴田氏の足利氏と南朝領との干係說に贊成し、蒲郡の一部たりし西郡に錦織氏ありて南朝に勤めしも同樣の干係なりしならんとて、當時の南北朝の爭の根本は莊園の爭

奪にあらずんば權力の爭ひなりし事實を述べ尾張に於ける南北朝の分野を說明せり。午後九時三十分散會、來會者三十餘名（幹事尾佐竹猛氏報）

◉熊本縣史蹟調査事業

熊本縣にては、一昨年川上知事在任の際之が調査保存の必要を認めて、縣令を出し、遺蹟の發掘を禁じて保存上に注意する所あり、之が調査機關の設置を計畫したりしが、昨年より、縣費補助の下に縣教育會が社會教育の一事業として、之が調査をなす事となり。五月より事業の開始を見たり。今其の方針を聞くに、各郡の教育會と連絡を保ちその報告を待ち、委員の實地調査を行ひて得たる結果を年一回若しくば二回報告書を刊行して世に紹介すると同時に保存法を講ずるにありと云ふ。現任委員は文學士古賀德義、同平野年、角田政治（以上當任委員）、下林繁夫、縣屬矢野寛、同村上廣、松原泉雲の七氏にして、昨年末の事業としては、調査の方面に於て玉名郡、八代郡、宇土郡等の半ばを了し、保存に就いては有名なる井寺石室の整理を行へり。報告書は近く其の第一册を出して右調査の結果を載すべしと云ふ。

會報

例會 二月二日午後一時三十分より文科大學第九教室に於て開催左の講演ありたり。

加羅地方旅行談　文學士　今西龍君

支那旅行談　文學博士　内藤虎次郎君

編纂會 一月二十三日午後三時文科大學陳列館貴賓室に於て開催三浦、濱田兩評議員外委員書記一同出席原稿締切期日の繰上每號二名の擔任者、誌面體裁の變更等について協議せり。

二月二十二日午前十一時より同所に開催、三浦濱田兩評議員外委員書記出席原稿を整理せり。

◉入會

大阪市東區大川町大阪每日新聞社内　米田猪三郎
（右紹介者　岩井武俊）

京都市東三本木　雨森菊太郎

同　鴨川頭　伊達彌助

同　本町通十六丁目一四　丹羽圭介

同　北野御前通下立賣下ル成等庵　大島徹水

大阪市懷德堂内　松山直藏

大阪府泉北郡濱寺諏訪之森　北里　闌
岐阜縣多治見町　加藤喜平
伊勢國宇治山田市古市町　橋口長一
（右紹介者　三浦周行）
岐阜縣多治見町　加藤鉀太
同　清水仁一郎
（右紹介者　加藤喜平）
朝鮮鎭海灣要塞司令部　古川岩太郎
同　龍山駐劄軍司令部　小泉貞造
支那間島龍井村　末松吉次
（右紹介者　竹內榮喜）

會費領收報告（振替貯金拂込のものに限る）

（大正七年二月二十五日迄に受領の分）

一金壹圓貳拾錢（大正六年分）
河村　常造　寺石　正路　森田　博三
一金壹圓五拾錢（大正七年分）
浦上　宗衛　龍　肅　押上　森藏
河野　省三　米澤　元健　中村　孝也
中村　祐海　柳　昌　下村三四吉
竹內　榮喜　芝　葛盛　富田　仙助
瀨野　馬熊　關　世男　松島　淳
藤塚　隣　窪美　昌保　高松　清
一金參圓（大正六七年度）
村辻周次郎
一金參拾錢（大正七年度會費不足額）
柴田　喜八　吉井　太郎
一金壹圓貳拾錢（大正七年度、三十錢不足）
花見　朔己　中川　泉三

寄贈交換書目

「支那の佛教」（增野黃洋氏著）　丙午出版社
「日本の佛教」（同上）　同
國史叢書「藝侯三家誌」一、二、吉田物語一、　國史研究會
「年數歷代年號表」　本山彥一氏
考古學雜誌　八ノ四・五・六　考古學會
史學雜誌　二八ノ一一・二九ノ一　史學會
歷史地理　三一ノ一・二　日本歷史地理學會
東洋哲學　二四ノ一〇・一一、二五ノ一・二　東洋大學
經濟論叢　六ノ一・二　京都法學會
國學院雜誌　二三ノ一二、二四ノ一・二　國學院大學
飛驒史壇　三ノ八・九・一〇　飛驒史談會
尙古　七一・　廣島尙古會